

# 夏目漱石のユーモアの対象

— 『吾輩は猫である』を中心に—

李平\*

## 目次

- I. はじめに
- II. 金力者に対する風刺
- III. 権力者に対する風刺
- IV. 近代知識人に対する風刺
- V. 庶民に対する揶揄
- VI. 苦沙彌グループに対する風刺
- VII. おわりに

## I. はじめに

『吾輩は猫である』（以下『猫』と略する）は明治38年（1905）1月から翌39年8月まで、11回にわたって「ホトトギス」に断続に連載された長編小説である。連載回数によって人気は高まって、漱石もこの作品によって、忽ち名作家になった。その人気の主な原因は小説の面白さにある。小田切秀雄は『文學概論』の冒頭に、文學について次のように書いている。

文學は讀んでおもしろければそれでいい。何をつけ加える必要があろうか。遠い昔から、文學作品が書かれ、また讀まれてきたのは、それがおもしろいというだけの理由によっている<sup>1)</sup>。

しかし、『猫』は世間から賞賛されるばかりではなく、評論家などからは非難されたこともある。江藤淳は『決定版夏目漱石』で、次のように書いている。

\* 中國 青島大學

1) 小田切秀雄『文學概論』勁草書房、1872 p.5.

「猫」発表当時、作者に対する非難の多くは、このヒューモリストが「不真面目」で、「遊び半分」だということに集中された。彼の才氣縦横な軽口を「不真面目」と見たのは自然主義作家達であったが、上田敏なども自分のように積極的な文學をやっているものをさておいて、片手間にもを書いている漱石如きがもてはやされるとは怪しからん、という意味の言葉をもらしていたということである<sup>2)</sup>。

自然主義作家たちは、落語や講談の笑い、ユーモアなどという人生に伴う知恵と思想の別種類の表現及び不可欠の「遊び」を不謹慎だと見ているからである。『猫』の笑いは不真面目かどうかは読者が自身の体験を通して、また周辺の人物を点検してみたら自然に結論が出てくると思うが、ここで、それを論じる余裕はないので、略する。とにかく、漱石はこの作品によって、大いに發散できて、鬱病から脱出したことも事實である。それから次々に作品を発表したが、『猫』のようなユーモアに溢れる作品は『坊ちゃん』で終わった。『坊ちゃん』に比べれば、ユーモア、風刺の對象となった人物が多く登場したのは『猫』であると言える。今回、『猫』のユーモアの對象について、考察してみたいと思う。

『猫』は、猫の目を通して、猫の視点から、人間の滑稽さを表す作品である。主に金力、権力者を風刺、批判したが、近代知識人、庶民、さらに高等遊民の苦沙彌グループも、ユーモアと風刺の光に照らされた。つまり、漱石自身と彼のまわりの知人たちも風刺の對象になった。それでは、それらの人物に対する具体的なユーモアと風刺の内容を見てみよう。

## II. 金力者に對する風刺

漱石は『猫』の第9章で、まず金力者に對して風刺した。金力者に對する風刺は主に金田の言動を通して行ったのである。漱石はまず金田の外観について描寫した。

金田は「鼻の低いおとこである。單に鼻のみではない、顔全体が低い。……何となく変化に乏しい。……背が低いので、むやみに高い帽子と高い下駄を穿く」實業家である。夫婦二人は苦沙彌の門下生の水島寒月という大學生を気に入って、婿にしたい。しかし苦沙彌は「實業家は學校時代から大嫌いだ」。というのは「實業家は金さえ取れば何でもする」。金を作るには「義理をかく、人情をかく、恥をかく」、「三角術」を使う人

2) 江藤淳 『決定版夏目漱石』新潮文庫、1979、p.116.

たちだと、苦沙彌は思っている。それで、金田の縁談に積極的ではない。金田もそのことで、一層苦沙彌を憎むようになった。結局、陰謀を施し、苦沙彌の書齋生活を邪魔する。その陰謀は猫の盗み聞いた金田と鈴木の會話によって分かる。それは次のようである。

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙彌とか何とかいうじゃないか」

「ええ苦沙彌がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがねあの事件以來胸糞がわるくってね」

「御尤で、全く苦沙彌は傲慢ですから……すこしは自分の社會上の地位を考えているといいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、實業家なんぞ——とか何とか、色々小生意氣な事をいうから、そんなら實業家の腕前を見せてやろう、思ってね。此間から大分弱らしているんだが、やっぱり頑張っているんだ。どうも剛情な奴だ驚いたよ」

「どうも損得という觀念の乏しい奴ですからむやみに瘦我慢を張るんでしょう。昔からああいう癖のある男で、つまり自分の損になる事に氣が付かないんですから度しがたいです」「あはははほんとに度しがたい。色々手を易え品を易えてやって見るんだがね。とうとうしまいに學校の生徒にやらした」

「そいつは妙案ですな。利目が御座いましたか」

「これにゃあ、奴も困ったようだ。もう遠からず落城するに極まっている」

「そりゃ結構です。いくら威張っても大勢に無勢ですからな」

「そうさ、一人じゃあ仕方がねえ。それで大分弱ったようだが、まあどんな様子か君に行つて見て來てもらおうというのさ」

「はあ、そうですか。なに譯はありません。すぐ行つて見ましよう。容子は歸りがけに御報知を致す事にして。面白いでしょう。あの頑固なのが意氣消沈しているところは、きつと見物ですよ」

ここまできて、苦沙彌の家の裏の郁文館の學生のボールは苦沙彌の庭にしきりに投げ込まれ、學生がボールを捜しに來て、入らせてくださいというようなことが毎日何回も發生したことは、金田の策弄したことだと分かる。このボール戰術は確かに苦沙彌を悩ませている。それだけではなく、鈴木に苦沙彌の家へ行かせて、苦沙彌の苦惱の様子を見て報告することまでやらせる。これは更に金田の低俗さを示す。この陰謀が露見されて、苦沙彌は金力に對して次のように風刺した。

おや今度もまた魂胆だ、なるほど實業家の勢力はえらいものだ、石炭の燃殻のような主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、その頭がイスキ

ラスと同様の運命に陥るのも皆實業家の勢力である。地球が地軸を回轉するのは何の作用かわからないが、世の中を動かすものは確かに金である。この金の功力を心得て、この金の威光を自由に發揮するものは實業家諸君を置いて外に一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く實業家の御蔭である。

金田は、日本の明治維新以來の金力者の金力を使って、社會を自分の思うように動かす縮影にすぎない。日本は1868年から維新時代に入った。明治維新とは、端的に言うとも西洋文明、文化の輸入、模倣ということである。つまり、脱亞入歐ということである。その内實として、制度、衣食、建築などの西洋化、鐵道建設などがあげられる。これらの西洋化に伴う實業も展開された。漱石の『猫』の創作時点は明治38年（1905）年である。その当時、維新後35年を過ぎ、その恩恵を浴びた成金は開化とともに現れ、強力な勢力をなしていた。かれらは經濟的な力で政府と政策を左右して、自分を有利にする行爲は無視できない状態になった。漱石はそういう現状を見て、猫の言葉をもって風刺しているのである。金の力は明治時代の特産品ではなく、それは今日の日本でも現實的存在であり、依然としてその威力を發揮しつつある。つまり「世の中を動かすものは確かに金である」ということは昔も今も変わらない。『猫』の金力に対する風刺について、相原和邦は『漱石文學の研究——表現を軸として——』で次のように書いている。

これが實業家の称揚ではなく、これに對する痛烈な皮肉であることは、念を押すまでもないだろう。金田一派の描寫を通して、明治の成金の俗物性と金力を後盾とした横暴が暴露されているのである。このような皮肉は日清戦争および日露戦争を経て台頭して來た金融資本の實態に對する鋭い風刺になり得ていると同時に、近代日本における金力の根源的な批判として今日もなお有効性を失っていないといえることができる。

殖産興業、富國強兵という明治政府の志向と指導のもとで、300年の歴史のある三井、住友財閥は幕府時代の御用商達として、明治政府を迎えた。そして、今度また、新政府と手を組んで政商に轉身した。三大財閥の中の一つとしての三菱は明治期の動亂に便乗し政商として、巨万の利益を得てその礎を築いた。商會は西南戦争で政府側の軍隊に軍需品の輸送を一手に引き受けたばかりか、戦争終結の残った軍需品の處分までまかされ、一舉に莫大な利益を得ることになった。政府が西南戦争で支拂った戦費は4,150万円といわれるが、そのうち1,500万円が三菱の儲けだった。しかし、その裏には後藤象二郎を通じてときの最大の権力者大久保利通、大隈重信といった政府要人の後盾があったことは言うまでもない。三井の外に、また多くの財閥が維新の機運に乗って、成長してきた。その成長ぶりは三菱と並ぶほどだと言えよう。無論、三菱の儲け方と政府に對する斡旋はもつと

まい。その上、成長も早い。このように生まれた成金たちは維新の進展に従って益々成長し、強くなって、資本追求の欲望も日増しに膨張してきた。遂に國境を越えて日清、日露、韓國侵略、滿州事変、更に中國全面侵略戦争へとエスカレートした。「世の中を動かす」野望は、それからアジア全体、更に太平洋戦争へと狂奔していった。城山三郎の言うように、その戦争は突然発生したことではなく、長い間積み重ねられた結果である。明治時代に成長してきた資本追求は大正時代を経て、昭和時代に入ると、自他にも無益で屈折、苦痛な体験を味わっただろう。『猫』はその一翼を担った金力者の一面を端的に表したのではないだろうか。すなわち、その戦争はまさにそれらの財閥に支えられてきたのである。

### III. 権力者に對する風刺

権力者に對する風刺は権力者の代表としての役人に對して行ったのである。漱石は『猫』の中で次のように書いている。

役人は人民の召使である。用事を弁じさせる爲に、ある權限を委託した代理人の様なものだ。ところが委任された權力を笠に着て毎日事務を處理して居ると、是は自分が所有して居る權力で、人民など之に就いて何等の喙を容る理由がないものだなどと狂ってくる。

漱石は権力者の本來の義務を判り易く解釋し、また、權力を手に入れると忽ち傲慢になる権力者の心理変化をもうまく描き出した。最もこの問題をよく説明できるのは明治の文明開化のことであろう。日本の文明開化について、漱石は『現代日本人の開化』で自分の見方を次のように述べている。

もし一言にしてこの問題を決しようとするならば私はこう斷じたい、西洋の開化（すなわち一般の開化）は内發的であって、日本の現代の開化は外發的である。

ここに内發的というのは内から自然に出て發展するという意味でちょうど花が開くようにおのずから蕾（つぼみ）が破れて花卉が外に向うのをいい、また外發的とは外からおっかぶさった他の力で已むを得ず一種の形式を取るのを指した積なのです。

その理由は無論明白な話で、前詳しく申上げた開化の定義に立戻って述べるならば、吾々が四五十年間始めて打つかった、また今でも接触を避けるわけに行かないかの西洋

の開化というものは我々よりも数十倍勞力節約の機關を有する開化で、また我々よりも数十倍娛樂道樂の方面に積極的に活力を使用し得る方法を具備した開化である。

ここで、漱石は明治維新の文明開化が下からの自然の動きではなく、上から無理やりに押し付けられたものと指摘した。それで、消化不良になった。たとえば、文明開化の象徴としての鹿鳴館は建築は「擬西洋建築」と言われる。その中で行ったことは悉く「猿眞似」と指摘された。この開化は都市部と知識人に限られ、地方と多くの庶民にとっては無縁なことである。この現象について、森鷗外の『普請中』のなかには端的な描寫がある。それは次のようなものである。

ソファに腰を掛けて、サロンの中を見回した。壁の所々には、偶然ここで落ち合ったといふやうな掛物が幾つも掛けてある。梅に鶯やら、浦島が子やら、鷹やら、どれもどれも小さい丈の短い幅なので、天井の高い壁に掛けられたのが、尻を端折つたやうに見える。食卓の拵えてある室の入口を挟んで、聯のやうな物の掛けてあるのを見れば、某大教正の書いた神代の文字といふものである。

つまり、明治の権力者は、権力委託者の意見を聞かないで自分の思う通りに文明開化の政策を作って、実行したのである。人民はまだ文明開化の意義、必要性は何か、どういう風に受け入れるか、何がまず受け入れられる、何がその後でいいかも知らないうちに、政府に引き起こされた開化、即ち、西洋文明輸入の流れに流された。その結果はあちこち露呈されたアンバランスである。伝統和服の上に洋服を無理やりに着せられたという感じである。見ると、實に滑稽な感じを禁じえない。

権力者に對する批判は、瀬沼茂樹が『夏目漱石』で次のような見方を書いている。

しかしこういう近代社會の論理の把握からの思想的批判をもって全編をつらぬくだけの用意を漱石は欠いていた<sup>3)</sup>。

これは確かに言うとおりである。風刺は風刺に止まって、それ以上の心理、社會分析と描寫はない。しかし、それを漱石が用意をしていないかどうかは簡単に言えない事だと思う。この点についてはさらに漱石の文學の目的と繋がる問題であるが、ここで論じることではない。

3) 瀬沼茂樹『夏目漱石 近代日本思想家』東京大學出版會、1962 p.132.

## IV. 近代知識人に對する風刺

漱石は『猫』の第一章で、高等遊民の金縁眼鏡の美學者迷亭と大學生の東風君の話によって近代知識人の高踏態度を表して、それを揶揄する。迷亭は高等遊民のくせに、毎日あちこちふらふらして冗談ばかり言い散らしている。ある日、彼は『猫』の主人公の苦沙彌の家へふらりと現れて、また冗談を言う。

いや時々冗談を言うと人が眞に受けるので大に滑稽的美感を挑發するのは面白い。先達である學生にニコラス・ニッケルベールがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる『仏國革命史』を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言ったら、その學生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本文學會の演說會で眞面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であった。ところがその時の傍聽者は約百名ばかりであったが、皆熱心にそれを傾聽しておった。それからまだ面白い話がある。先立って或文學者のいる席でハリソンの歴史小説『セオファーノ』の話しが出たから僕はあれは歴史小説の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬところは鬼氣人を襲うようだと評したら、僕の向うに坐っている知らんといった事のない先生が、そうそうあすこは實に名文だといった。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を讀んでおらないという事を知った。

脱亞入歐、殖産興業、富國強兵の實現の爲に、明治政府はヨーロッパ諸國へ留學生を派遣して、軍事、醫學、經濟、工業技術などを勉強させた。漱石もその中の一員としてイギリスへ英文學の勉強に赴いた。そうして、知識人は維新の重役になった。このように、國を擧げて西洋文明に狂奔するとき、無論、歐州文明、文化を知るのはブームになったと同時に、一種のモダンにもなった。しかし、留學生たちは本當の西洋文化を習得したかどうか、それはその時期の留學生の言動を通して判るであろう。つまり、眞のヨーロッパ文明、文化を習得し、理解した人は少なかったといえよう。ドイツ留學から日本に歸った森歐外も「普請中」の日本には、ヨーロッパ文化の眞髓の美と自由はないと斷言した。明治維新後、西洋文化輸入が大に行われたが、その消化と吸収は問題になった。それに呈している様相は當時の人の話からすれば、擬西洋、猿眞似ということである。迷亭のような金縁眼鏡を掛けている美學者は、無論維新以來の新科目の美學を一応勉強し終えた人物である。ゆえに、彼は生まれつきのような冗談好き、人を翻弄することを好む人である。西洋のことは彼にとって、一層輕口材料になり、今までない西洋味は一味増えたということに過ぎない。そういう國情によって、あちこち西洋事情を吹聽する人の出てくるのも不

思議ではないだろう。当時の知識人だけでなく、普通の人としても、西洋のことをよく知っていることは、個人の先進性とレベルを誇示することができるし、時代の潮流のリーダーとしての資質をも人に感じさせる。知識人は虚栄心の強い人が多いものであるが、西洋通であることで、人々から羨ましがれ、尊敬される、すなわち当人の虚栄心を満足させられる。そういう事情があるので、本当にヨーロッパ文化を知るかどうかは別にして、西洋文明は洪水のように入ってきて、まだ十分に消化吸収できないうちに、さらにまた新しいものが入ってくるという状況の中で、皮相的な受容をする。しかし、実際に、それらのすべてを知ることは困難であり、知ったかぶりをして、随時に、あるいは臨機応変に嘘ついたり、軽口や冗談を言っても、ばれないのだ。そうして、皆に自分の知識量を誇示することができる。それは、まさに西洋文明追求と消化不良のために起こった結果と現象であろう。ここで、漱石はそういう状況に伴ってきた知識人の虚栄心と見栄を風刺した。

大學生の東風君は「この頃の詩は寝轉んで讀んだり、停車場で讀んでは到底分かりようがないので、作った本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。……全くその辺が詩人の特色かと思います。」と迷亭に言った。これは、知識人が歐風詩を真似て作ったが、まだその詩の表現方法と言葉遣いは充分習得できないことを説明しているのだろう。また、西洋文化の消化不良の一つの証據だと言えよう。

金力者と権力者に對する風刺はその内容から言えば、珍しくない。近代知識人に對する風刺は日本明治時代の知識人の虚偽と輕薄な一面を表しているし、急いでヨーロッパ文明を輸入するときの生半可な一面を表す。國を擧げてヨーロッパ文明に狂奔したとき、漱石は冷靜にその不實な一面を發見し、風刺した。この開化について、人々はまだそれを受け入れる能力と欲望を十分備えていないのに、上から押し付けられたので、全体的に適應できない様子を活寫した。

## V. 庶民に對する擲揄

庶民に對する擲揄は「二弦琴の天璋院」、「俵屋の神さん」と「落雲館」の學生を代表として行われる。「二弦琴の天璋院」という「師匠はいやに上品ぶって自分だけ人間らしい顔をしている」人物である。漱石の妻・鏡子の『漱石の思ひ出』によれば、「北側の茶の間の方の垣根の外には、二弦琴の御師匠さんがいつも二弦琴をならしてをりました」という。妻の鏡子はその二弦琴の師匠についてそれ以上何も感じていないが、漱石は非常に



不満を感じた。おそらく、その師匠が年中無分別に琴を鳴らすのが非常識で、漱石の書齋生活を邪魔したからだろう。

また、「俵屋の神さん」は「寒月だって、誰の事だって——全体あの俵屋の神さんは氣に食わさん奴だ……寒月さんばかりの事じゃありません」。妻の鏡子は漱石の家の「隣に俵屋があって、そこのおかみさんが始終がみがみ言ってるのが大変氣になった見えて」と言っている。「始終がみがみ言ってる」俵屋の神さんは漱石の生活の静寂を破壊し、彼の神経を刺激したようである。

「落雲館」の學生たちは終日漱石の家の周辺で「降參しねえか」「しねえしねえ」、「出てこねえ」「落ちねえかな」、「吠えて見ろ」「わんわん」と騒いで、またよく「ダムダム弾」というボールを漱石の庭に落とす。妻の鏡子はこのことについて「前の通でどこかの中學生がボール投げをしてるが、過ってボールを家の庭中へ投げ込んだ。すると此奴怪しからんとあって、逃げる中學生を捉まへて、その家に怒鳴り込んで行って行って根津権現の方へ引立てて行ったというのです…よく裏の郁文館中學の生徒がボールを投げ込んだりしたのが根にある」と言っている。これらの生活の中の些細なことで、怒鳴って、喧嘩になることはよく漱石研究者に、漱石の性格の問題として提起されている。

つまり、ここに書かれている事は漱石の個人生活の中で実際に起こったことに基づいている。そこに記されている人物たちは、全て漱石の氣に入らない人物である。これらの庶民に対する揶揄、皮肉はどれぐらいの意義があるかと言えば、それは日常生活の中の俗物の俗事であるにすぎないことだと思う。

## VI. 苦沙彌グループに對する風刺

苦沙彌グループに對する風刺は、風刺というよりも、自嘲と自省と称する方が妥当だと思う。次に苦沙彌がグループの人と自分を反省する場面を見てみよう。

自分が感服して、大に見習おうとした八木獨仙君も迷亭の話によって見ると、別段見習うにも及ばない人間のようである。のみならず彼の唱導するところの説は何か非常識で、迷亭のいう通り多少瘋癲の系統に屬してもおりそうだ。いわんや彼は歴乎とした二人の氣狂の子分を有している。甚だ危険である。滅多に近寄ると同系統内に引き摺り込まれそうである。自分が文章の上において驚嘆の余、これこそ大見識を有している偉人

に違いないと思ひ込んだ天道公平事實立町老梅は純然たる狂人であって、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記述が棒大のざれ言にもせよ、彼が驚嘆院中に盛名を擅ままして天道の主宰を以て自ら任ずるは恐らく事實であろう。こういう自分もことによると少々御座っているかも知れない。同氣相求め、同類相集まるというから、氣狂人の説に感服する以上は——少なくともその文章言辭に同情を表す以上は——自分もまた氣狂に縁に近い者であるだろう。

ここで、漱石は自分周辺の人々を風刺すると同時に自分自身の弱点をも意識していて、それを自省した。その自省からもう一度眼をグループの人と周りの人に廻らして点検してみた。

こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようである。案外心丈夫になってきた。ことによると社會はみんな氣狂の寄り合いかも知れない。氣狂が集合して鑄を削ってつかみ合い、いがみ合い、罵り合い、奪い合って、その全体が団体として細胞のように崩れたり、持ち上がったたり、崩れたりして暮らして行くのを社會というのではないかしらん。その中で多少理屈がわかって、分別のある奴はかえって邪魔になるから、瘋癲院というものを作って、ここへ押し込めて出られないようにするのはないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人で、院外にあばれているものはかえって氣狂である。氣狂も孤立している間はどこまでも氣狂にされてしまうが、団体となって勢力が出ると、健全の人間になってしまうのかも知れない。大きな氣狂が金力や威力を濫用して多くの子氣狂を使役して亂暴を働いて、人から立派な男だといわれている例は少なくない。何が何だか分からなくなった。

自身とまわりの人に對して、外から内まで、表から裏まで解剖をしてから、また、近くから遠くまで、少數から全体までのように解剖の目をもっと深く、もっと廣い範囲へ移した。これは漱石の社會批判、人間批判であると同時に、漱石の人間認識と社會認識だとも言える。この認識は無数の戦争による人間慘禍などによって、正しいと証明されたと言っても過言ではない。この認識は今日にも通じる現實的意義があると思う。漱石のこの人間認識と社會認識はこれからの人々にとっては、警戒の役割を果たしていると言える。

## VII. おわりに

漱石の風刺の対象について小宮豊隆は次のように解釈している

漱石は眞面目であり、純粹であり、眞面目で純粹である故に、倫理的に潔癖であった。……自分の周囲に蠢めく他人と比較すれば、自分は他人より遙かに眞面目であり、純粹であり、また遙かに美しいものを持っている。しかし一旦自分を天の前に置く時、自分は自分の中にも、自分が輕蔑し憎惡する他人と同じように、醜穢なものが充ちている事を、認識せざるを得ない。……漱石はこの、どうする事も出来ない、しかしどうにかしなければならぬ心持から、他人をも自分をも、思い切って、笑ってしまおうとするのである。

また、

相原和邦は漱石の風刺の徹底について次のように言っている。

笑いの対象は、苦沙彌一家の瑣事から「大和魂」に酔う日露戦争直後の日本の情勢を経て「開化」を生み出した二十世紀文明そのものに及ぶ。その批判は終章十一の議論に極まっているわけだが、今日まで見通したといえるほどの風刺の徹底は注目に値しよう。

漱石が『猫』で行った風刺は確かに徹底的だったと言えよう。というのは『猫』における風刺の対象が全ての階層の人間に幅広く及んでいるからである。漱石は『猫』で自分の全ての不満と憎惡を晴らして、精神と心理の安定を取り戻したわけだが、以上のように『猫』の批判は、社會全体の人々に向けられていたのである。

ここで言った精神の安定は『猫』を書く前後の精神と心理状態を指して、終生の精神安定のことを言うわけではない。つまり『猫』誕生前後の一時期だけのことである。たとえば、それからまた何か悩みがあっても、『猫』を書く前のようなノイローゼではなく、日常生活と体に直接悪い影響を及ぼさないで、精神安定か不安定かの程度のことではない。正常な人生に伴う、誰でもある悩みである。だから、ここで言う精神安定を無煩惱と理解されるのをお断りする。

このように漱石は『猫』で徹底的な社會批判をしたが、その批判は「かなり激しい破壊的調子をおびてはいるが、どこまでも「江湖の處士」としての知識階級の分化に即して、

いわば社会的善から發する、八つ当たりにかきプロテストにとどまるのである。・  
・ ・ ・ 社会風刺をよくみるならば、人格上の問題に始終していることがわかり、この問題  
がここでは東西、新旧文化の問題をふくんでいることを知る」と瀬沼茂樹は『夏目漱石』  
で書いている。漱石は『猫』で社会風刺、社会批判をしたが、どこまでも笑い散らすだけ  
で、深く考えさせる厚みと深さを持っていない。元々、漱石は何か目的を以て『猫』を創  
作したわけではない、思い当たりにまかせて書いたので、作品から、何か目的、思想を讀  
み取るのは、漱石にとっては意外な注文だと言えよう。實際、そうするべきではないと思  
う。

## 参考文献

- 『漱石全集』岩波書店、1966.
- 『吾輩は猫である』岩波書店、1993.
- 加藤富一『夏目漱石——「三四郎の度胸など——」』教育出版センター、1991.
- 『森鷗外全集』1、筑摩書房、1986.
- 相原和邦『漱石文學の研究——表現を軸として』明治書院、1988.
- 夏目鏡子『漱石の思ひ出』角川文庫、1966.
- 小宮豊隆『漱石全集1 解説』1965.
- 江藤淳『決定版夏目漱石』新潮文庫、1979.
- 瀬沼茂樹『夏目漱石 近代日本思想家』東京大學出版會、1962.

## 〈요약문〉

### 나쓰메 소세키의 유머의 대상

- 『나는 고양이로소이다』를 중심으로 -

리 평

본고는, 일본 근대의 대표적인 작가인 나쓰메 소세키(夏目漱石)의 『나는 고양이로소이다(我輩は猫である)』에 드러난 유머(humor)의 대상에 관하여 고찰해 보았다. 『나는 고양이로소이다』는 고양이의 눈을 통하여 고양이의 시점으로 인간의 우스꽝스런 모습을 나타낸 작품이다. 그들의 대상은 돈을 가진 자에 대한 풍자, 권력을 가진 자에 대한 풍자, 근대 지식인들에 대한 풍자, 서민에 대한 야유, 근대에 새로이 출현한 高等遊民이라 불리는 계층에 대한 풍자로 나눌 수 있을 것이다. 작가는 작품 안에서 돈이나 권력을 가진 자를 주로 그 비판의 대상으로 삼고 있지만, 이에 그치지 않고 근대 지식인과 서민, 그리고 근대에 새로이 등장한 계층까지, 번뜩이는 유머와 풍자의 대상으로 삼고 있다. 또한 나쓰메 소세키 그 자신뿐만 아니라, 주변의 지인(知人)들조차 풍자의 대상으로 하고 있음을 알 수가 있다. 즉 나쓰메 소세키는 서양화를 우선시한 나머지 관료주의에 몰들어, 뒤틀어져만 가는 근대 일본의 모습을 확인하였고, 이에 고양이의 눈을 빌어 약자의 입장에서 권력을 가진 자를 풍자하였으며, 근대가 표본으로 삼고 있던 모습에 일말의 의심조차 없이 따라가던 일본국민의 각 계층을 야유하게 된 것이다. 나쓰메 소세키가 『나는 고양이로소이다』에서 보인 유머는 단순한 웃음이 아닌, 비판정신에 가득 찬 것으로, 일본 근대를 풍자한 것으로 볼 수 있을 것이다.

주제어 : 夏目漱石(나쓰메 소세키), “我輩は猫である”(『나는 고양이로소이다』), 近代(근대), ユーモア(유머), 風刺(풍자)